

三村晃功編

濟建集

△松平文庫本▽

古典文庫

三
村
晃
功
編

濟
建
集

古
典
文
庫

古典文庫四二五冊

不許覆刻

昭和五十七年二月二十日印刷發行

非売品

集 繼 濟

編 者 三 村 晃^{てる} 功^{のり}

發行者 吉 田 幸 一

印刷者 帝都印刷製本株式会社

發行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一一四五九七番

凡 例

一、私撰集『済継集』の伝本は、現在知られるところでは、島原市立島原公民館松平文庫所蔵にかかる一本だけであり、本書はそれを底本にして、忠実に翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等すべて底本のままとしたが、漢字の字体は、おおむね通行字体に従った。

2、底本の誤脱、誤字などはそのままとし、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）と傍注した。

3、底本の「みせけち」「補入」等はそのままとした。

4、便宜上各歌に一連番号を付し、初句索引の検索に便ならしめた。

三、解説は、成立の問題を中心に考察して公表した「松平文庫所蔵『済継集』の

成立」(『中世文学研究』第六号、昭和55・8)に、多少の訂正と具体的事実を加えたものである。

四、初句索引は、歴史的仮名遣いによって配列した。

五、本書の成るに際しては、翻刻の御許可を賜わった島原市立島原公民館に、深謝申しあげる。

昭和五十六年一月十日

三 村 晃 功

目次

一、	凡例	三
二、	濟繼集〈松平文庫本〉	一
三、	解説	三三
四、	初句索引	二七

濟
繼
集

△松平文庫本▽

島原市立島原公民館蔵

濟 繼 集

〔春〕

立春のこゝろを後京極摂政家によませ給ひける

一 あら玉の年や神代も帰らんみもすそ川の春の初風

おなしこゝろを

二 三よし野は山も霞て白雪のふりにし里に春はきにけり

三百首御哥の中に立春のこゝろを

三 おほとものみつの浜松かすむなりはや日のもとに春や立らむ

人／＼よみ給ひける百首に

四 逢坂や関の戸明て鳥か鳴東よりこそ春はきにけり

春立日よませ給ひける

五 あ妻には今日こそ春の立にけれ都はいまた雪のふるらん

おなしこゝろを

六 めつらしき春にいつしか打解て先ものいふは雪の下水

早春を

七 風寒みまた雪きえぬしからきの外山かすみて春は来にけり

百首の御哥の中に

八 棹ひめや衣ほすらし春の日のひかりにかすむ天のかく山

余寒のこゝろを

九 空は猶かすみもやらす風冴て雪けにくもる春のよの月

おなしこゝろを

二〇 此ころは谷の杉村をと冴てかすみもしらぬ春の山かけ(ママ)

霞

二 なかめやる遠里小野はほのかにてかすみのにこる松のかせ哉

三 雪消て打出るなみやかすむらんかすめる山のあかつきのかね

三 千里まで気色にこむる霞にも独春なきこしのしら山

海辺霞

一四 春霞へたつる比は白浪のこすとも見えぬすゑの松山

おなし心を

一五 あきさぬるうなかみかたをみ渡せはかすみにまかふしたのなみ(ママ)

島

霞隔関路

一六 春くれは先そ立きるあふさかの関もるものはかすみ也ける

おなしこゝろを

一七 (ママ)行
こゝら。末こそ見えね山城のこはたの里をかすみこめつゝ

鶯

一八 氷たにとまらぬ春の谷風にまた打とけぬ鶯のこゑ

一九 わか宿に鶯いたなくなるは声もはたらに花やちるらん

二〇 我宿の梅かえに鳴鶯はかせのたよりに香をやとめこし

二一 しろたへの雪ふりやまぬ梅かえに今そ鶯花と啼なる

三百六十首の御哥中に

二三 かつ消てたまらぬ物は鶯のこゑするのへの春のあは雪

野外鶯

三 鶯の宿あれぬらしくたゝ野ゝ萩のふるえは今そやくなる

百首奉らせ給御哥の中に

四 今も猶つまやこもれる春日野ゝわか草山に鶯の鳴

三百首の御中に

五 心にもかなはぬ春をやつくすらん芹つむ野への春のうくひす
(ママ)

六 ふるすより若木の梅の初花にわたりそむなる鶯のこゑ

松上鶯

七 わかめかる春にしなれは鶯も木つたひわたるあまの橋立

毎朝うくひすをきくと云事をは二条大宮にて人

くよみ侍しに

八 日数行たひの庵を立毎にきゝすてかたき鶯の声

うくひすを

元 頼まれぬ花のこゝろと思へはやちらぬ先より鶯のなく

おなしこゝろを

三 鶯の谷より出るこゑなくは春くる事を誰かしらまし

子日

三 千とせてふ小松引つゝ春のゝに遠さもしらす我はきにけり

三 ねたくわれ子の日の松にならましをあなうらやまし人にひかる

ゝ

三 おほつかなけふは子日か海士ならば海松をしそ引へかりける

三 子日する野へに小松のなかりせは千代のためしに何をひかまくヒ

若菜

三 霜雪にうつせれてのみ見しのへのわかなつむまで成にける哉

三 かなつむ我を人見は浅みとり野へのかすみと立かくれなん

三 河上にあらふ若菜のなかれても君かあたりの瀬にこそよらめ

五十首御哥の中に

三 たか袖のにほひをかりて梅花人のとかむる香にはさくらん

おなしころを

三 いつの春とはれならひて梅の花咲より人のかくまたるらん

三 難波津にさくや昔の梅の花今も春なるうらかせそ吹

夕梅と云事を

三 袖の香にまよふもつらし人を待夕は梅のにほはすもかな

百首御哥の中に

三 春毎にもの思へとや梅かゝのみにしむはかり匂ひそめけん

百番の御哥会の時梅を

三 ふけにける高津の宮のいにしへを見ても忍へとさける梅かえ

四 此春も人こそとはね宿の梅たれかなさけを花にみせまし

ある女房のつほみたる梅のえたにつけていひつ

かはしける

五 またしとや梅をみつゝもとはさらんひらくるものを我か思ひは

かへし

六 かねて君おもひひらくる梅かえにならふ人なき身成へしとは

隣家梅

七 一枝もをらんとなりの梅花にほひはえたる心ちこそすれ
と

れうきてんの前の梅のはなさかりに侍りけるを

ことねり折につかはしたるえたに結ひ付てたて

まつりける

四 九重のうちに匂ふ梅花を人ちらさしと思ひしものを

かへし

五 九重のおなしみかきの内なれはあたにはちらぬ花と社みれ

梅花薫

六 こちかせの梅ふくかたに窓を明てにほひはねやの内に入つゝ

柳

七 あら玉のとしを経つゝも青柳の糸はいつれの春かたゆへき

八 竿姫の糸そめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ